國學院大學學術情報リポジトリ

石田梅岩と陸象山の思想：
学術と思想運動に対する思考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 立紅 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001562

石田梅岩と陸象山の思想

—学術と思想運動に対する思考—

On the Thought of Ishidabaigan and Luxiangshan: Reflections on the Academic and Ideological Movements

韓 立 紅

キーワード：石田梅岩 陸象山 心学 学術思想 社会活動

关键词：石田梅岩 陆象山 心学 学术思想 社会运动

要旨

日本石門心学の始祖の梅岩の思想と中国陸王心学の始祖の象山の心学は、思想の形成期に多くの共通点があった。しかし、両者の死後、象山の思想が衰微の道に辿り、最終に学術思想の段階に止まったが、梅岩の思想が弟子たちによって庶民の中に普及し、社会思想活動となり、日本思想史、教育史及び経済史に積極的な役割を果たした。その主な原因としては、まず、二者の死後、各自の思想の発展方向が違う道筋に辿ったゆえである。象山の思想が次第に神秘化され、簡単化され、衰微に落ち、学術思想段階に止まるようになったが、梅岩の思想が、次第に通俗化と日常化され、社会の思想運動となった。次は、支配階級の思想に対する必要と好悪が、その思想が学術思想から現実の社会思想活動に転化できるかの重大要素となっている。象山思想は支配階級に排斥され、次第に衰え、少数の知識人にしか理解され研究されなくなる。石門心学は支配階級に支持を得た故に、徳川後期において庶民の生活の中に浸透できる倫理道徳の一つとして庶民に受けられるようになり、現実の社会思想運動と成った。最後、民衆の受け入れる基礎が重要な条件の一つとなっている。象山の思想が、少数の学問を研究する知識人階層にしか知られていなかったが、石門心学は、広大な民衆階層に受け入れたゆえに、社会思想活動に転化できたと考えられる。

摘要

日本石門心学的始祖石田梅岩与中国陆王心学始祖陆象山，二者的思想在形成初期存在很多共同点。但是二者死后，各自的思想发生变化。象山思想停留在学术思想的阶段，而梅岩思想对日本思想史、教育史、经济史皆产生作用，在日本成为一种社会实践运动。究其原因，首先，二者死后，各自的思想走向不同道路，象山思想走向简单化和神秘化，梅岩思想则走向通俗化日常化；次之，统治阶级的需要和喜好，对某种学术思想是否能够转化为社会实践运动起导向性作用。最后，广大民众的认知程度和接受程度对某种学术思想是否能够转化为社会实践运动起决定性作用。象山思想没有被统治阶级所需要，也没有在民众当中被推广，因此停留在学术思想阶段。而梅岩思想则被统治阶

級所接纳，渗透于庶民生活当中，因此得以成为社会实践运动。

石田梅岩(1685-1744)は、日本近世庶民の哲学者として、石門心学の始祖と言われている。「心」学思想が梅岩の哲学思想の核心として、「商人道」思想と「儉約」理論は、梅岩の経済思想の核心となっている。一方、陸象山(1139-1193)は、中国南宋時代の思想家として、「心」を最高の哲学範疇に、象山の「心学」哲学体系を構築した。石田梅岩と陸象山は日本石門心学と中国陸王心学の開祖と言われ、日本の石門心学と中国の陸王心学の創立及び発展のため大きな寄与をしてきた。本文は、二者の思想が中国と日本社会に果たした役割について考察を行いたいと思う。

石田梅岩と陸象山は、思想の形成期に多くの共通点があった⁽¹⁾。学術淵源において、二者は皆孟子思想の影響を受け、「心」学を創立した。世界本体論において、象山の「道器」合一論と梅岩の「陰陽」と「道」の合一説は、其の立場が同じである。心性論において二者とも「心」「性」を区別せずに、「心」「性」の合一を主張する。学問観において二者は皆道德実践の方法で人間の「本心」を「頓悟」することを主張する。また、社会と大衆に対しても二者は関心を寄せ、知識人として、各自の済民救世の理論を打ち出し、救済運動の実践活動を行ってきた。

しかし、両者の死後、各自の思想に変化が起こり、違う道筋に辿った。象山の思想が衰微の道に辿り、最終に学術思想の段階に止まったが、梅岩の思想は弟子たちによって庶民の中に普及し、社会思想運動となった。本文は、二者の思想の果たした役割の比較を通して、学術と思想運動について筆者の思考を述べてたいと思う。

1. 象山と梅岩の思想が果たした役割

宋代から清代にかけて、朱子学を官学とし、朱子学が中国思想界を支配する状況の中で、象山思想の存在自体が重大な意義をもつことである。また、象山の思

(1) 韓立紅、「中国における石門心学思想研究の現状とその展望」『季刊日本思想史』(第65号)。
韓立紅、「石田梅岩と陸象山の世界本体論及び心性思想」『國學院大學紀要』(第44巻)、2006年。
韓立紅、「石田梅岩と陸象山との認識論に関する比較」『國學院大學雑誌』2006年2月。
韓立紅、「石田梅岩の思想」『公共する人間2. 石田梅岩』、東京大学出版会、2011年。

想は正統の朱子学に抵抗する「異説」の思想家達を生み出しただけでなく、明末清初の早期啓蒙思潮の形成、ないし中国の近代進歩思想家の形成に対して積極的な役割を果たし、彼らに豊富な思想材料を提供した。

例えば、明代の思想家及び教育家の王陽明は、象山の「心学」思想を継承し、象山の「心即理」の学説を発展させ、独自の「知行合一」説と「致良知」説によって、朱子学に対抗した。陽明は、象山の「心即理」学に賛同し、象山の「心即理」説を基礎にして「致良知」学説を提出した。彼の「知行合一」説と「知行併進」説は、程頤らの「知先行後」説に反対した。

「心即理」は象山の思想基礎である。陽明も「心即理也、天下人有心外之事、心外之理乎？」⁽²⁾と言い、象山の主張に賛成している。陽明と象山の継承関係については、多数の研究者は、陽明が象山の影響を受けたと認めている。陽明学は、象山と孟子の理論を継承した一方、象山と孟子を超越し、中国哲学史において大きく成就した。

陽明の死後、陸王心学の影響は数代に及び、人間の欲望を肯定し、自我を肯定し、個性を提唱する思想家達を生み出した。そして、陸王心学の合理的部分が、明末清初における早期啓蒙思潮の源の一つとなった。明末清初の啓蒙学者の中、陸王心学の影響を最も深く受けたのは李贄と黄宗義である。

明代思想家の李贄は、象山の『『六経』註我、我註『六経』』⁽³⁾の気迫に傾倒され、「六経」と『論語』『孟子』などの経典が弟子達の記録したものとして、「万世之至倫」ではないと主張した。李贄は権威と教条への崇拜に反対し、専制主義に反対した。彼の言論は、支配者らに怒られ、後に逮捕され、自殺させられた。李贄は、異端的な個性開放の思想者として、「童心」説が彼の思想基礎であった。李贄が言う「童心」は、即ち陽明の言っている「本心」と「良知」である。しかし、些細意味の差異がある。陽明学の中では、良知が即ち義理で、天理に合うかは良知が準則となっているが、李贄の思想の中では、義理が童心を遮るものとして、義理が多く教え込まれるほど童心が多く喪失してしまうと見られていた。童心説は、「良知」説より発展してきた思想であるが、「良知」説の構造を突破している。両学説は批判継承のロジック関係が内包している。

明末清初の啓蒙思想家、史学家の黄宗義も陸王「心学」の影響を受け、朱子学派

(2) 「伝習録上」、『王陽明全集』巻一、2頁。

(3) 「語録上」、『陸九淵集』巻三十四、399頁。

の「理在気先」の理論に対し批判を行った。黄宗義が書いた『明儒学案』は、浙東史学研究的の気風を作り出した。陸王「心学」の思想は、中国近代以来の知識人に積極的な役割を果たした。魏源も陸王「心学」の実践を重んじる思想の影響を受け、理学家の「心性迂談」の思想に対し、批判を行った。魏源は、「知」が「行」の中から来るものであると主張し、清が亡国の運命に落ち、中国がアヘン戦争に直面している時、『海国図志』という著作を出し、西洋の技術を学んで、銃砲を製造し、海防を強くし、西洋の侵略に抵抗することを主張した。中国近代維新派の代表人物の康有為も、陸王「心学」の思想を崇尚し、「変」が「物之理」と認め、「能変則存、不変則亡；全変則強、小変則亡」という思想を提出し、中国近代社会の発展に重要な役割を果たした。もう一人の近代維新派の代表としての譚嗣同も陸王「心学」に賛同し、程朱理学が崇尚している「綱常名教」に批判し、「革去故、鼎取新」という思想理論を提出し、近代知識人の封建束縛から突破する精神を表現した。以上の思想家たちの先進思想は、主観的能動性の強調、思考能力の重視といった象山思想の特徴との深い関係が見られる。

以上、象山思想の役割と比較して見ると、梅岩思想の社会意義は更に大きいものと思われる。まず、思想史的角度から見れば、梅岩は、特色のある庶民儒学者として、当時徳川時代に流行している儒学思想の中に神道思想と仏教思想を取り入れ、即ち神、仏、儒三教の理論を一つに融合し、「正直」「誠」「慈悲」という方法で「知心」「知性」を追求する「心学」の庶民倫理思想を提出し、徳川時代の思想界を豊富させ、下層の農工商階層のために、简单易行の倫理道徳修養方式を提供した。

梅岩は、「正直」と「儉約」とを結合し、それを町人の生活規範と行為準則にした。それだけでなく、さらに「士農工」の階層まで浸透し、「四民」は、各自の「職分」に応じて、この倫理道徳の標準に従って実践すべきであると主張した。したがって、武士と町人の「道」が同じであるという理論を導き出し、「職分」において四民が平等であるという思想を主張した。梅岩の生きた時代は、町人階層が経済地位があっても政治地位のない時代であった。徳川時代の重農抑商の政策の下で、梅岩は、武士の信奉している儒家思想を理論基礎として、賤民としての町人が士農工と同じく「君」の「臣」に属していて、「身分」において区別があっても、「職分」において平等であるとした梅岩の思想は、日本思想史においても

つ意義は大きい。

次に、梅岩を始祖とする石門心学が、日本庶民教育史において果たした意義も重要である。寺子屋も大きな役割を果たしたが、石門心学の心学校舎が、庶民教育に対する教育機関の役割を果たした功績は看過できない。梅岩の死後、心学校舎が弟子によって継承され、教学方式と内容も変化が起き、學員信徒の数量も増えてきた。町人から農民、武士から大名、都市から農村、學員信徒が日本の至る所に行き渡った。石川謙氏の統計によると、1789年から心学校舎の数が各地で次第に増加し、1830年まで、日本34の国の中で200にも近い心学校舎が作られたという⁽⁴⁾。200にも近い心学校舎の数、これは膨大な数字である言えよう。当時の徳川時代の最大教育機関の藩校は、経済面からも政治面からも幕府と各藩主の支持を得ていたが、その数は223という⁽⁵⁾。この点からいうと、独立した教育施設と独自の教員体系を持っている石門心学の影響力は言うまでもない。石門心学の普及の範囲、及び独特の教育思想と教学方式などから見る場合、石門心学は、町人の子弟、庶民階層の学習要求に応え、日本教育史、特に庶民教育史において無視できない意義があると言えよう。

最後に、梅岩の思想は日本の江戸時代後期の産業経済発展に積極的な役割を果たした。まず、梅岩は、「正直」と「儉約」によって、「知心」「知性」の到達を追究することを提唱した。これによって、人間が普通の日常生活と労働の中で「天」との「合一」境界を追求することが可能となった。简单易行の方式は町人に積極的な実践方式を提供し、職分に忠誠する町人に成り得る道筋を提供した。「正直」の心は、町人に経済社会の売買関係と契約関係を守らせる。「儉約」は、町人に正当的商業手段で財富を蓄積させ、更に多い財富を創造させる。町人が経済社会で果たす使命は財富の享用でなく、財富の創造であること認識させる。また、「儉約」と「正直」は、徳川時代の町人に商業資本力の規範を提供し、近代経営理念の発展に積極的な役割を果たした。さらに、梅岩の「形二由ル心」の思想、「四民」観及び「商人道」の思想は、町人に良好な職業労働観念を樹立させ、その社会的存在価値と社会的職能を肯定した。「形二由ル心」の思想と「四民」観及び「商人道」思想は、商人に士農工商各階層は「身分」の区別が有っても「職分」において平等であることを認識させた。武士は武士で、農民は農民で、商人は商人であ

(4) 石川謙、「石門心学史の研究」、岩波書店、1935年。

(5) 唐沢富立太郎、「日本教育史」、誠文堂新光社、1968年。

る。人間は自己の職責に従って、自己の「職分」に尽くし、自己の職業に忠誠すべきであることを要求される。この思想は、町人の社会存在価値と社会職能を肯定し、町人の労働積極性を激発させた。敬虔且つ献身的な職業労働観念が日本近代産業化の発展のために貢献した役割は極めて大きい。

上述したように、中国の陸象山の心学思想の展開を見ると、梅岩の心学思想と出発点は似たような学術思想であったが、庶民教育史、産業経済史上の影響力は、梅岩ほどではなかった。象山の思想は衰微し、学術段階にと止まり、陽明学と明清思想に対し啓発の役割を果たしたが、最終的には現実的な社会運動にはならなかった。しかし、日本の梅岩思想は、学術思想の発展段階を超え、石門心学は社会思想活動となり、日本思想史、教育史及び経済史に積極的な役割を果たした。

どのような原因で、象山の思想が形成初期に社会に大きな反響を呼び、後に衰微に落ち込むようになったのだろうか。反面、梅岩の思想が形成初期に弟子学徒の人数が少なかったが、後に日本社会に大きな役割を果たし、現実的な社会運動になり得たのだろうか。

2. 発展の道筋における相違

上述したように、石田梅岩と陸象山の死後、各自の思想は門人弟子によって継承され、発展方向が次第に違う道路に辿るようになった。象山の思想が次第に神秘化され、簡単化され、衰微に落ち、学術思想段階に止まるようになった。梅岩の思想が、次第に通俗化と日常化され、社会の思想運動となった。

象山の死後、象山学を広める責任を負っていたのは、象山生前の弟子であった。象山の弟子達は浙東派と江西派とに分けられた。江西派の弟子らは象山の思想と学説に教条的に守り、学術の上においては発展がなかった。浙東派の弟子たちは、象山の「本心を発明する」という学説を重視し、象山の「心学」をいっそう「易簡」化した。浙東派の代表人物は「四明先生」と呼ばれる楊簡などである。彼らは、浙東四明地域で象山学を熱心に広め、象山学の四明地域での盛行に貢献した。しかし、楊簡をはじめとする浙東派の人々の行き過ぎの傾向は、「釈を援きて儒に入る」結果をもたらし、結局象山学を衰微の道に追い込んだ。

元代、朱子学は科学の唯一の標準となった。学者達が朱子学を尊崇し、朱子学を研究し、朱子の解釈に従って孔孟を読むようになった。朱子学は、「正統」とな

り、「正宗」となった。朱子学は、盛んとなり、弟子信徒も膨大な数字となり、明清まで思想界を支配するようになった。反面、象山思想は、支配者階層の重視と承認を受けなかった故に、弟子が次第に少なくなり、寂寂の状態の中で朱子学の隙間に象山学を伝えていた。

以上から見ると、象山の弟子の中に英才はあったが、象山の死後、象山生前のように大きな影響を持ち、朱陸の対峙局面が形成できなかった。象山の思想が明代になって、王陽明の翻案によって再び盛行するようになった。王陽明が象山の思想の「心即理」の学説を吸収し、「知行合一」学説と「致良知」学説を提出した。象山の思想と陽明思想が、後世陸王「心学」と呼ばれた。

象山の思想の発展道路をみると、明代から清初にかけて、陽明の思想形成に影響を与え、明末清初の先進思想を啓発したが、最終的学術段階に止まり、現実的
社会運動となり得なかった。

梅岩の死後、師の弟子達が、梅岩の思想を伝えるため、積極的に各地に奔走した。梅岩の弟子の中、最も特色のあるのは、石門の孟子と言われる手島堵庵である。堵庵は、梅岩思想中の元々の哲学性、宇宙観など抽象的理論に欠けていた内容を更に減少し、梅岩の思想を実践性、宗教性に富む通俗的道德理論に変化させた。梅岩の思想は石門心学となった。この点から見れば、堵庵は、石門心学史における重要な人物である。堵庵は弟子達を管理する体系を作り、梅岩の「心学」を系統化し、組織化した。梅岩の時期に、散在していた弟子達が堵庵の時期に至っては、統一的に組織化され、各地域で固定な講座の場所一即ち心学校舎を作った。講座の内容から見ても梅岩の時期と比べて変化があった。梅岩の時期に、心性問題についての討論、天地人に関する思考などの問題が重要な比重を占めた。しかし、堵庵の時期に至って、講座の内容が、個人の修身、家の整え、悪を捨て善に向うべき等、日常生活の内容と関わる通俗倫理道德の内容を中心として行われた。例えば、梅岩の時期の講座は「都鄙問答」「齊家論」及び「石田先生語録」などのような理論的、思想的な内容が主としていたが、堵庵の時期の講座は、「町人身体柱立」「前訓」「我津衛」等のような内容が主としていた。これらの内容は、ほとんど大衆に「安分知足」し、上尊下卑の秩序を守り、国家と主人に忠を尽くすべきと教えた。梅岩の思想は大きな傾斜が発生した。もちろん、梅岩の思想の中にも大衆哲学及び通俗倫理道德の内容と要素も含まれていたが、堵庵

の時期にこれらの要素をさらに強調したので、梅岩の思想が変化した。

もう一人、石門心学史において重要な地位を占めている人物は中沢道二である。道二は堵庵の弟子であり、心学の普及に大きく寄与した人物であった。彼は、江戸を含む関東地域を開拓し、石門心学を日本全国に普及した。道二の時期のもう一つの特徴として、心学と武士階級及び幕府との密接的結合である。道二は、武士を信徒として吸収し、大名の援助の下で多くの心学校舎を建てた。道二が心学道話の形式で幕府の布告を解釈し、忍耐従順を宣揚していたため、幕府の肯定を受けるようになった。後期の石門心学が、幕府との関係が日々密接となり、後に幕府に利用されるまでになった。

思想内容と伝播方式に大きな変化があった故に、梅岩の思想が日々通俗化、大衆化の発展の道筋に行き、最終現実的社会思想運動となった。

3. 支配階級の影響

支配階級の思想に対する必要と好悪が、その思想が学術思想から現実の社会思想活動に転化できるかどうかの重大要素となっている。

象山思想の形成初期は南宋時代であった。初期段階における象山の思想は排斥を受けなかった。それだけでなく、幾度も皇帝からの褒章を受けた。宋寧宗皇帝が曰「陸九淵滿門孝弟者成」⁽⁶⁾と。「年譜」によると、「寧宗皇帝更化之末年、興崇正学、尊礼老臣。慨念先朝碩儒、咸賜嘉谥、風歴四方。謂象山先生發明本心之学、有大功於世教、易名文安、庸示褒美。」⁽⁷⁾ということもあった。当時、象山の家族は、「孝弟」の模範として皇帝の賞賛を受け、象山の思想も、「正学」として、推崇を受けた。象山の思想が、推崇を受けた時期は、朱子の思想が「偽学」とされ、禁学されていた時期であった。朱子の思想が、「異端」として排斥を受けたが、朱子の死後、解禁されるようになった。宋理宗の時期、朱子の道学が重視されはじめ、理宗は詔曰「朕每觀朱熹『論語』『中庸』『大学』『孟子』注解、發揮聖賢之蘊、羽翼斯文、有補治道。朕方歴志講学、緬懷典刑、深用嘆慕、可特贈太師、追封信国公。」⁽⁸⁾と、3年の後「徽国公」と封し、孟子を祭祀する礼儀で朱熹を祭祀

(6) 「年譜」、『陸九淵集』卷三十六、491頁。

(7) 同上、525頁。

(8) 『統資治通鑑』卷一六四、理宗宝慶三年。

した。度宗咸淳5年(1269)朱熹の故郷婺源を「闕里」と封し、朱熹の地位を孔子と相当する高度に高めた。以来、朱子は歴代に尊崇され、朱子学も思想界の正統思想となった。

朱子の思想が封建社会の正統思想として尊崇されて以来、元明以後の科挙は皆朱熹の四書を標準としていた。読書する儒士も、功名を追求する人も皆朱子学を正学として勉強し、朱子学を研究し、朱子学が広められるようになった。象山の思想は、象山の死後、支配階級の支持を得なかった故に、次第に衰え、少数の知識人にしか理解され研究されなくなり、「異説」として排斥されるようになった。実際、象山の思想が「異説」といわれてきたのも、支配階級の好悪の影響を受けた故である。朱子の「道統」「治統」の観念と「三綱五常」の思想と比較してみれば、象山の思想が確かに反抗思想の生まれる要素が含まれていて、支配階級の利益と衝突するところがあるので、支配階級の承認を受けなくなるのも自然なことである。「治道」「補道」できる朱子学が支配階級の推崇を受けられたので、朱子学が迅速に普及し、発展できるようになった。一種の学術思想が、もし支配階級の褒美と肯定を受けられるなら、それが迅速に社会の中に普及し、大衆の社会思想運動に成り得る可能性がある。この角度から見ると、朱子学が中国、ないし東アジア諸国に与えた影響力を低く見るものではない。

当然、支配階級が一種の思想に対して必要と思わなく、嫌悪を示す場合、その思想が社会に冷遇され、広範的な伝播もできなくなる。この思想は、高閣に置かれ少数の知識人にしか研究されなく、学術の思想として学術界にしか認められなく、現実的な社会思想運動とは成り得ない。象山の思想はこういうような学術思想である。

象山の思想と比較してみれば、梅岩の思想が、梅岩の死後、ずっと支配階級の肯定を受けてきた。前述したように、梅岩時期の講座は、「商人道」に関する内容以外、世界観や心性論及び学問観などの思想内容も多かった。しかし、堵庵の時期に至っては、講座の内容がほとんど大衆に上尊下卑の秩序を守り、国家と主人に忠を尽くすべきの内容であった。また、道二の時期に至って、心学は武士と幕府と結合するようになった。道二は、武士を吸収しただけでなく、大名に興味を持たせ、大名の支持の下心学校舎を建てた。道二は、また心学道話で幕府の布告を解釈し宣伝し、後期の石門心学与幕府の関係が日々密接となり、幕府に利用されるようになった。

徳川時代の天保改革(1830-1844)時期、幕府はすべての集会娯楽と演芸を禁止したが、心学、神道講釈、軍学講義、及び昔話は禁止しなかった。また、幕府は1845年から、1867年まで継続して、毎年1月11日に、手島心学は非常に価値のある運動であり、商人階級の支持を受けるに足りる、という趣旨の声明を出した⁽⁹⁾。後期の心学は、手島堵庵と中沢道二の手によって、既に支配者階級の好意と承認を受けた思想として、支配者の支持を得た。「上下尊卑」の秩序を守り、従順、忍耐精神を宣揚する石門心学は、庶民の生活の中に浸透し、武士階級の日常生活の中まで影響を与えるようになり、庶民の生活倫理道德の一つの内容となった。支配階級が必要し、支持を与えた故に、石門心学が徳川後期において庶民の生活の中に浸透できる倫理道德の一つとして庶民に受けられるようになり、現実の社会思想運動と成った。

4. 民衆の基礎

ある思想が、少数の学問を研究する知識人階層にしか知られていないか、広大な民衆階層に受け入れられているかは、学術思想から社会思想活動に転化できるかどうかの重要な原因の一つとなっている。象山思想の学術思想化と石門心学の社会思想活動化がまさにこの状況を反映している。

象山の思想が、士人階級の利益を代表した。象山の思想形成の初期、朱子学がまた「正統」として尊崇されていなく、象山の思想の形成に適応の生長土壌を提供した。故に、朱陸対峙の状況が形成でき、その当時の天下が「朱陸」時代と呼ばれた。象山の講釈があるたびに、常に「聴者貴賤老少、溢満途巷」の盛況が現われ、弟子信徒と聴衆が溢れるほどであった。しかし、元明以後は、朱子学が科挙の標準とされ、象山学は、冷遇されるようになった。象山の思想が少数の人にしか研究されなく、広大な大衆に知られていなくなった。

朱子の思想が支配階級の好意と肯定を得た故に、迅速に広められ、科挙の標準となった。それだけでなく、朱子学は中国封建社会の倫理道德となり、人々の行為の準則と規範となり、日常生活の中に浸透した。もちろん、宋明理学が節操と道德を重視し、理で情を統制し、自我節制、奮発立志などの思想もあり、主体意

(9) ベラー、『日本近代化と宗教倫理』、未来社、1957年、250頁。

志の構造と倫理責任感の構築面において有益な役割を果たし、博大で、精密の朱子学は中国人の思惟水準を高めた。しかし、一方、朱子学が、科挙の標準答案となって以来、大衆の思惟の自由発展を束縛し、思想の硬化をもたらした。

もちろん、筆者はここで朱子学の中国社会における役割を述べたいわけではない。筆者が強調したいのは、学術思想が社会で普及し民衆階層の基礎を持っていると、それが民衆の生活の中で重大な役割を果たせることである。石門心学が普及できたことも成熟した民衆基礎が備わった故である。その成熟した民衆基礎は町人階級である。石田梅岩の生きていた時期は、町人が活躍していた時期であった。町人たちが鎌倉、室町時代の練磨を受け、経済実力が未曾有の発展を得た。武家経済の膨張が町人の繁栄をもたらし、町人は江戸と大阪を中心に膨大な物質財富を蓄積した。町人は、商品の流通を掌っただけでなく、資金流通の方式を利用して、大名たちに影響力を与えている。町人達は自己の経済実力を背景にして、自我を主張し、自我を表現する活動をした。

しかし、町人の経済実力は、町人の経済地位を高めたが、身分制度を強調する日本封建社会において、四民の中でも最も低層にある町人の政治地位を改めることができなかった。身分制の制度が実施されてきた日本は、7、8世紀に中国から官僚支配制度を取り入れたが、中国の科挙で官僚を選抜する制度を採用しなかった。日本は、身分制度が実施される一方、中国封建社会と同じく、農業を立国の本とし、「崇本抑末」「重農抑商」の政策をとった。「天下を治むるに、穀を貴び貨を賤しむは古の善政也」(太宰春台「経済録」)「商人の心は職人百姓とは違ひ本骨折らずして坐て利を儲くる者」(荻生徂徠「政談」)との言論が徳川時代の支配階級の思想傾向を代表したといえる。経済地位があるが、社会の最低層にいる大多数の町人達にとって、身分の変更は天に登るほど難しいことであった。

中国は古来から農業大国として、幾千年以来、「重農抑商」「崇本抑末」という政策を基本国策として実施してきた。商業が極めて繁栄していた宋代と明代も商人に対し抑制の政策を実施し、商人に対して偏見があった。商業の発展にしたがって、商人の経済実力も上昇したが、自分の商人という「職業」に対し敬虔に思い、誇りに思ったことは無かった。中国の商人は、プロテスタンティズムの倫理の中の「天職」観念も無かったし、梅岩の「商人道」の思想の中の「形ニ由ル心」から来る「形ヲ踐ム」という「職分」観念もなかった。中国の商人が追求していることは、経済地位の変化によって、政治地位を変えることである。勿論、中国の

商人も「士農工商」四つの階層においては、最も下位に位置している。しかし、中国は身分制の世襲制がなく、科挙によって社会階層は互いに流動の状態になっていた。中国の商人たちが経済実力が備えたら、子弟を勉強に努力させ、科挙に合格させ、身分を士人と一変できる。科挙で身分を一変することは、中国の歴史に枚挙にいとまがないほど多い。このような環境の下、中国の商人は終始日本の商人のように独立な人格の形成ができなく、日本の商人のように堅固な階級が形成できなかった。

日本場合、身分制の世襲制が実施されて、経済地位があっても政治的にどうにもならない町人達は、文化事業における創作と思想面における思索が始めた。このような民衆基礎の上に、「商人道」をはじめ、後の石門心学が日本で広範に普及でき、民衆の日常生活の中に浸透でき、現実の社会思想活動と成り得る。

以上述べたように、梅岩の心学と象山の心学は、思想の形成期に多くの共通点があった。しかし、両者の死後、象山の思想が衰微の道に辿り、最終に学術思想の段階に止まったが、梅岩の思想が弟子たちによって庶民の中に普及し、社会思想活動となり、日本思想史、教育史及び経済史に積極的な役割を果たした。その主な原因としては、まず、二者の死後、各自の思想の発展方向が違う道筋に辿ったゆえである。象山の思想が次第に神秘化され、簡単化され、衰微に落ち、学術思想段階に止まるようになったが、梅岩の思想が、次第に通俗化と日常化され、社会の思想運動となった。次は、支配階級の思想に対する必要と好悪が、その思想が学術思想から現実の社会思想活動に転化できるかどうかの重大要素となっている。元代、朱子学が支配階級に正統思想として尊崇されて以来、象山思想は支配階級に「異説」として排斥され、次第に衰え、少数の知識人にしか理解され研究されなくなる。石門心学は支配階級に支持を得た故に、徳川後期において庶民の生活の中に浸透できる倫理道德の一つとして庶民に受けられるようになり、現実の社会思想運動と成った。最後、民衆の受け入れる基礎が重要な条件の一つとなっている。象山の思想が、少数の学問を研究する知識人階層にしか知られていなかったが、石門心学は日本34の国の中で200にも近い心学校舎が作られ、広大な民衆階層に受け入れたゆえに、社会思想活動に転化できたと考えられる。

(天津市社科基金TJWY12-04)